

『チーズちゃんと世界遺産』

小川 凜桜

「わーい、夏休みだあ！どこか旅行に行きたいな。いろんな動物さんに会えて、景色がきれいな場所、どこかないかなあ。」

と、お気に入りの世界遺産の本をパラパラしはじめたチーズちゃん。旅行が大好きな9才のねずみの男の子です。

「わあ！この場所行ってみたい！」

チーズちゃんは、本の中から三つの場所にしるしを付けました。一つ目は、オーストラリアにある『グレートバリアリーフ。』美しいサンゴしょうが広がる海です。二つ目は、マレーシアのボルネオ島にある『キナバル自然公園。』たくさんの動植物を見ることができ公園です。三つ目は、中国の『四川ジャイアントパンダほご地区』ぜつめつにひんしたパンダや野生の動植物を守っている場所です。

「ぼくのイメージにピッタリ！よし、ここに行ってみよう！」

さっそく、旅のじゅんぴを始めたチーズちゃん。持ち物は、お金、チーズ、着替え、水着、メモ帳とペン、お水、世界遺産の本、そしてパスポート。それらをリュックにつめたら、準備かんりよう！

その後チーズちゃんは、成田空こうからねずみ専用機チーズ号に乗り込みました。飛行機の中では、本やメモ帳を出して、旅のアイデアをまとめます。しばらくたち、とうとう最初の目的地、グレートバリアリーフにとうちやくしました。

「よし、まずはダイビング！いろんなお魚さんを見たいんだ。」

とさっそく海にもぐったチーズちゃん。
「わあ！本で見た通りのサンゴがきれい！青や紫のお魚さんかわいいなあ。あ！アジのむれもいる。」

と、きれいなお魚さんやサンゴにむ中になりながら、どんどん海の深い方に泳いで行きました。すると、奥の方でカメさんがサメに追いかけていました。

「大変！カメさんを助けないと。」

チーズちゃんはそう言ったかと思うと、サメに近寄り、サメの背中にささつと乗って、しっぽをつかみブンブン回しました！そして、サメの目が回っていつすきに、特大パンチをくらわせました！するとサメが、

「ぎゃあー、まいったまいった。ゆるして下さい。」

と言ったのでチーズちゃんが、

「よろしい。もうだれもおそわないようにね。」

と言いました。小さいけれど、実は力持ちでとっても強いチーズちゃんなのでした。そ

れを見ていたカメラさんが、

「パチパチパチ！おみごと！すごい。助けてくれてありがとう。私は、アオウミガメのアオミよ。」

と言うと、チーズちゃんが

「アオミちゃん、よろしくね。(チーズちゃんのおなががグーとなりました)私、たたかったらおながが空いちやった。あ、そうだちよつとまってるね。」

ブクブクジャバジャバ：

「海そうとチーズをませて：よしできた！ハイどうぞ。」

と、チーズちゃんときくせいチーズをアオミちゃんにわたしました。

「ありがとう！とってもおいしい！チーズちゃんのチーズさいこうだよ。」

とアオミちゃんが言いました。それを見ていたサメが、

「ぼくにもチーズを下さい：。」

と言ってきました。

「OK！」

ブクブクジャバジャバ：

「はい海そうチーズだよ。」

とわたすと、

「ありがとう！うまい：！オレは、ホオジロザメのサメオ。おれいに何かするよ。」

「え、本当？じゃあ、ぼくをマレーシアまで連れて行ってくれないかなあ？」

「おやすごいよう。じゃあ背中に乗って。」

サメオの背中に乗ったチーズちゃんは、

「アオミちゃん、バイバイ。元気でね！」

「うん。チーズちゃんありがとう。気を付けて行ってきてね。」

とお別れのあいさつをしました。

こうして、ぜつめつきぐしゆのアオウミガメさんを救って、さらにサメオとも友だちになったチーズちゃんは、次の目的地のマレーシアのキナバル自然公園へと向かいました。

「わー！サメオ泳ぐのはやーい！背中の子もさい高！」

そして、しばらくすると、キナバル公園があるボルネオ島に着きました。

「サメオ、ありがとう！助かったよ。元気でね！いつか日本にも来てね。」

「うん、チーズちゃん。楽しかったよ。気を付けてね！」

と、送ってくれたサメオにお礼を言ってお別れをしました。

その後、ねずみバスに乗り公園の前でおけると、かわいい歌声が聞こえてきました。

声に耳をかたむけると、

「ねずみくん。こんにちは。ぼくはチャガシラガビチョウのチャガチャガだよ。ようこそ！」

と、鳥さんが話しかけてきました。

「チャガチャガくん、こんにちは！ぼくはチーズちゃんだよ。お歌が上手だね。」

「ありがとう。ぼくは、キナバル公園の案内人だよ。チーズちゃん、ラフレシアってお花知ってる？」

「うん。とっても大きなお花だよね？」

「そうそう！大きいだけじゃないけどね…。それは見てからのお楽しみ！」

「え、気になるなあ。チャガチャガ、そこまで案内してくれる？」

とお願いと、チャガチャガがラフレシアガーデンに案内してくれました。すると…。

「うー何か変なおいがする…。」

とチーズちゃん。すると、チャガチャガが、

「へへっ。実は、これラフレシアのおいなんだよ！強れつなおいがとくちょうなのだ。」

「うわー、くさくて鼻がおかしくなりそうだ。」

と、チーズちゃんは逃げ出しました。

「チャガチャガ、くさすぎるよ！きれいな景色でも見て気分を変えたいよ。」

と、言うとき、チャガチャガは次のところに案内してくれました。有名なつり橋です。

「わあ、本で見たつり橋だ。わたってみよう。うわーゆれるー。」

と、つり橋をわたりきったチーズちゃん。その時、オランウータンさんがへびにおそわられているが見えました！

「チャガチャガ、大変！オランウータンさんが。」

「ちよっと待って、あれ毒へびだよ。」

「よし、助けに行こう。」

と言った、毒へび退治のため軍手をはめたかと思うと、さらにガサガサゴソゴソ…

「できたぞ！ねむい薬入りチーズだ！」

そして、木に登ってオランウータンさんの前に行っていました。

「おーい、へびさん。こっちこっち！」

「何だお前は。食われたいのか？」

「べーだ！できるもんならやってみな！」

「なんだと！なまいきなねずみめ！」

と言ったへびが、シャーと口を開けて飛びかかってきたので、チーズのかけらをへびの口の中に投げ込みました！するとへびはグーグーいびきをかいてねてしまったので、チーズちゃんはなわでへびを木にくくりつけました。それを見ていたオランウータンさんが、

「わー、すげえ！強いんだな。おいら、オランウータンのウータ。助かったぜ。」

と言ったと同時に、ウータのおながグーとなりました。

「おいら、朝から何も食べてないから、おなかペコペコだぜ。」

「ぼくに、いい考えがあるよ。ちよつとまってるね。」

と、ガサガサゴソゴソ：

「さつき取ったイチジクをまぜてと。さあできた！イチジクのチーズ！チャガチャガの分もあるよ。はいどうぞ。」

とくせいチーズを二人にプレゼントすると、

「サンキュー！」

と二人は言つて、ムシヤムシヤ食べ始めました。

「わー、うまい。こんなにおいしいチーズ食べたことがない！お札に何かするぜ。」

とウータが言いました。

「実は、この後中国のパンダほごくに行きたいと思つているんだけど、何か良い方法ないかなあ？」

とチーズちゃんが言いました。

「うほつ。それは遠いな。よし、じゃあおいらがすごいイカダを作つてあげるぜ。」

と言つて、木やら巨大な葉っぱやらいろんなものを持ってきてイカダを作つてくれました。

「わあ、すごい！ほが葉っぱになつているんだね。」

「そうだぜ。エンジンもついているんだぜ！」

「ウータすごい、天才！チャガチャガも本当にありがと。いつか日本にも来てね！」

とマレーシアの港で二人とあいさつをしながらイカダに乗り込みました。

「わわ！すごい。このイカダ目的地がセットできるんだ！よし、中国にセットしてと

…」

ここでも、ぜつめつきぐしゆのオランウータンを救うかつやくを見せたチーズちゃん。

イカダに乗るとつかれて眠りました。そして起きると、中国が目の前に見えていました！

「わあ。ねていたらあつという間に着いた！ウータのイカダすごいなあ。」

そのあと、さらにイカダに川をどんどん上つて行き、目的地のパンダほご地区の近くまで来たチーズちゃん。イカダを降りると、そこは一面に広がる竹林でした。パンダちゃんもたくさん見えてきました。

「わあ！パンダちゃんかわいいなあ。そうだ！竹の葉っぱをつんでおこう。」

と葉っぱをリュックに入れ、さらに奥の方に進んでいきました。すると、パンダちゃんがたくさんいるパンダレイクの方から、大きないかく声が聞こえてきました。

「がるるる…」

声の方に近よつてみると、パンダちゃんがユキヒョウにおそわれ、木から動けずにいるのです！

「わ、大変だ！助けにいかなきや。」

といったかと思うと、さつと木に登りパンダちゃんに作戦を言いました。ゴニョニョ…
「OK！ねずみくん。」

と、パンダちゃんが言ったかと思うと、パンダちゃんは、ユキヒヨウの上はずどんを落ちました！そのすきに、チーズちゃんが耳の穴に入り込みくすぐりました。そして笑っているユキヒヨウを、パンダちゃんとチーズちゃんが二人で持ち上げ、地面にまたずどんと落としました。するとユキヒヨウは、

「ごめんなさい。こうさん！助けてください。」

とユキヒヨウ。パンダちゃんは、チーズちゃんに笑いかけながら、

「ぼくは、パムパム。助けてくれてありがとう。けど、へとへとだあ…」

「本当だね。ぼくはチーズちゃんだよ。あ、そうだ、ちよつとまってね。」

と言うと何やら、トントングチャガチャ…

「できた！チーズちゃんとくせい、竹の葉チーズだよ！はい、どうぞ。」

「わあ！ありがとうチーズちゃん！とってもおいしいよ。」

すると、それを見ていたユキヒヨウが、

「私もおなが。ペコペコ。私にちようだい。」

と言ってきたので、

「OK！ちよつとまってね。」

というと、またトントングチャガチャ…

「はい、できた。ユキヒヨウさんには、ハム入りチーズだよ。」

「わあ、ありがとう！」

と、ムシャムシャ食べるユキヒヨウ。チーズちゃんは、

「もう悪さしないようにね。」

と言うと、ユキヒヨウが反せいた顔をしながら言いました。

「はい、わかりました。私の名前はゆきんこよ。チーズちゃん、おいしいチーズのお礼

に何かさせて。」

「ありがとう。じゃあ、イカダを止めてあるところまで乗せて行ってほしいな。」

とお願いすると、ゆきんこはチーズちゃんを背中に乗せてあつという間にイカダのところまで乗せていってくれました。後から、パムパムもついてきました。

「二人とも、ありがとう。ぼくは、日本に帰るね。いつか二人も日本へ来てね。」

と言って、ウータのイカダにまた乗り込みました。こうして、チーズちゃんは、ここでもぜつめつきぐしゅのパンダちゃんをすくい、

大まん足で日本に戻っていきました。